

第7章 町場左沢と農山村の交流関係

第1節 往来と街道

(1) 大江町の交通路

左沢から月布川の上流部へ向かう道は「湯殿山往来」もしくは「左沢市場道」と呼ばれた(『七軒東の郷土史』)。古寺(小寺)から大井沢へ抜ける道は出羽三山へ参詣する旅人にも利用されたが、むしろ前述した商品作物を谷口集落である左沢の市場へ輸送する道として重要であったといえよう。

大石田より上流の最上川には、舟の通行が困難な難所がいくつも存在したために、青芋や紅花などの軽くて高価な商品は、大石田まで羽州街道を陸送され、大石田で積み替えられて川舟で運ばれることが多く、米などの重くて安価な商品は左沢の河岸からダイレクトに川舟で運ばれた。

一方、上り船で上流部に運ばれたのは、内陸部では産出しない塩や、東北地方では栽培できない綿などが主な物資であったが、文化的な物資も運ばれてきた。

たとえば、ひな人形などの玩具類や仏壇などの家具類をはじめとして、上方の物質文化が日本海海運と最上川水運を通じて、内陸部にまで浸透することとなった。その中には、戦災や開発の影響などによって、大都会では珍しくなった貴重な文化遺産が少なからず存在する。

ところで、先述の「へんぐり」が改修されたのも、月布川が屈曲して流れる上を通行していたために、崖崩れや雪崩の被害を受けることから、とりわけ冬季の安全な通行を意図して、河川と道路の大規模な改修が行われたのであった。この改修によって、物資を安全に運搬することが可能になった。

前近代の物資輸送は、陸路においては牛や馬の背中に荷物を載せて運ばれた。古代において、既に都と地方を結ぶ官道が整備され、各地から租庸調の租税を都へ集めたが、官道には駅家と称された中継基地が置かれ、一定の数の馬が留め置かれた。この駅家を代替する例外的なものとして、東山道の最上川に沿って水駅が置かれていたことが「延喜式」から知られ、古代の段階で、既に最上川水運が利用されていたのであった。

さて、馬は馬小屋に泊めて、良質の秣を食べさせなければ力を発揮できないとされ、江戸時代の宿場町で、食事を提供する旅籠と呼ばれた宿屋は、元来は馬に餌を出す宿を意味したとされる。

それに対して、牛は道草を食わせておいてもだいじょうぶで、野宿も平気であったし、坂道では力を発揮したので、宿場の整備された主要街道では馬が使われ、ローカルの山道では牛が使われるのが一般的だったといわれる。

大江町内に、かつては広範に存在した茅葺きの民家には、一角に馬小屋が設けられ、馬や牛が飼われていた。これらの牛馬は農耕用の役畜として利用されたのみならず、月布川沿いの集落から左沢の町場へ物資を輸送する手段としても、貴重な存在であった。

以上のように、出羽三山をめざす南北方向の道と物資輸送の東西方向の道とが地域を越えて織り合わせられることによって、大江町内の交通路が整備され、沿道の景観が形成されていったといえよう。

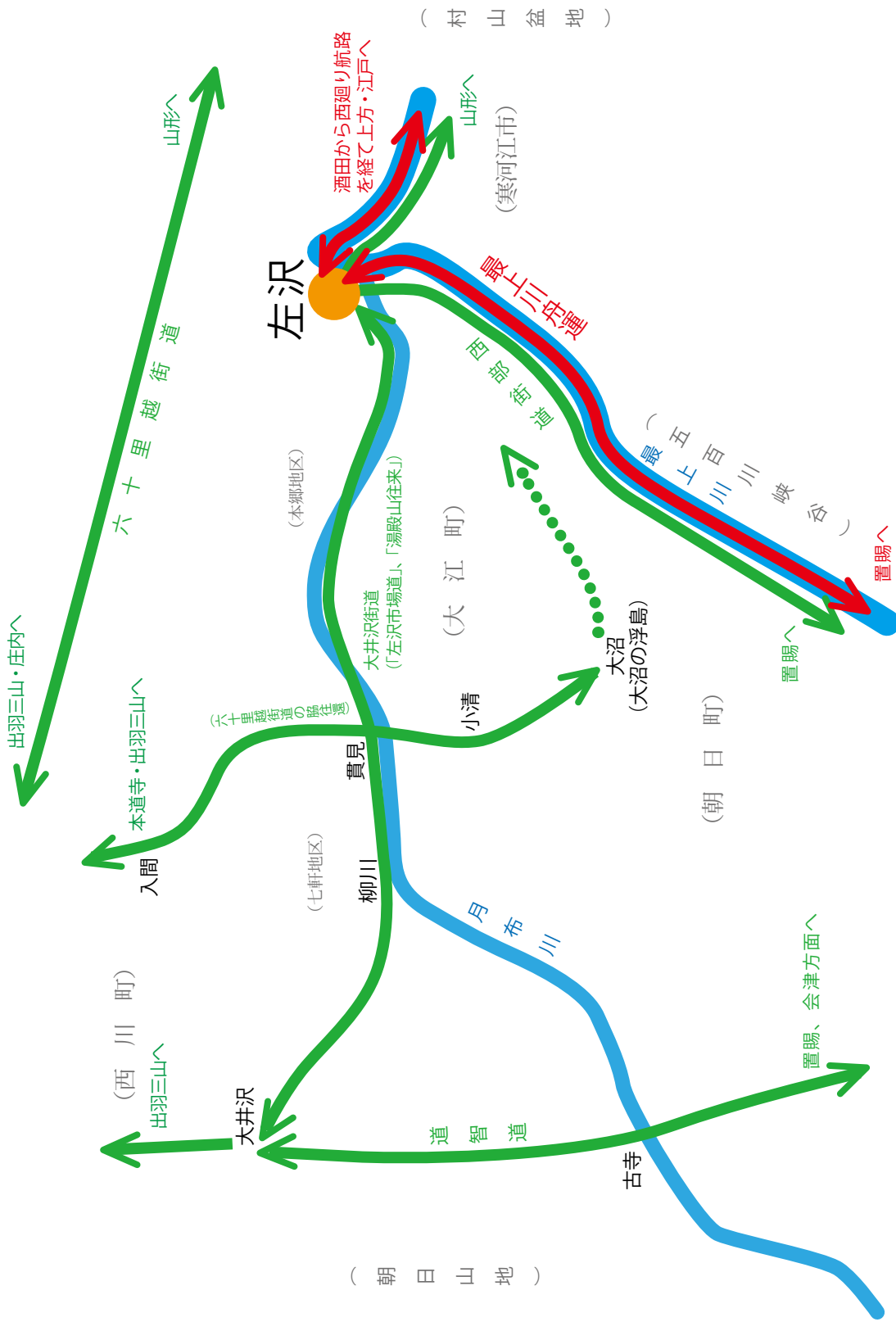
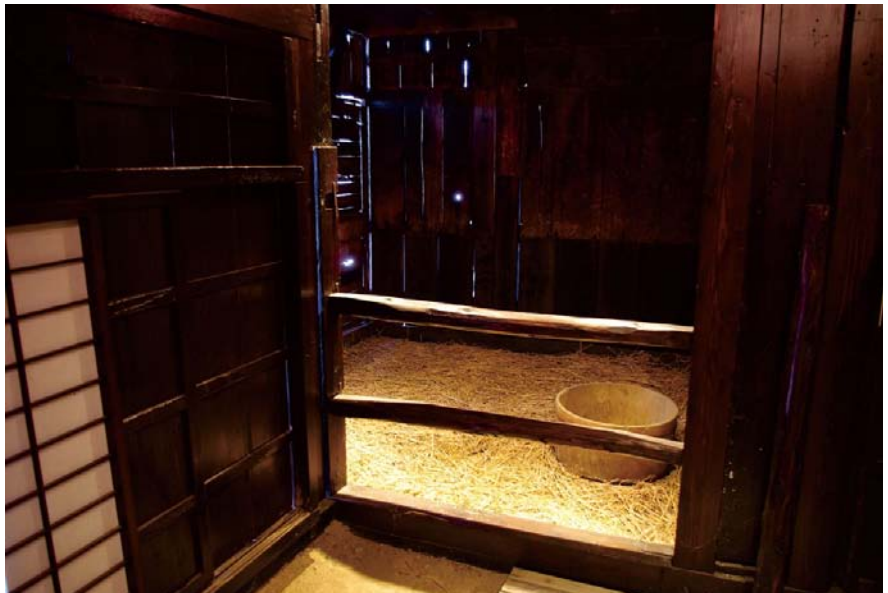


図7-1 交通路模式図



「川掘替碑」
(貫見)



馬小屋
(旧齋藤半助住宅)

(2) 信仰の道

大江町を通る街道は、かつて出羽三山参詣の往還として盛んに利用された。そのひとつは、朝日山地の東麓を断層線に沿って通る道智道と呼ばれた街道であり、もうひとつは、朝日町の大沼浮島から峠を越えて、小清集落に降りてくる街道であった。

ア 道智道

道智道の名称は、中世に大井沢の大日寺を中興したとされる道智上人の名に由来するものであり、大井沢は、出羽三山の八方七口と称された江戸時代の登山口のひとつであり、大日寺は、出羽三山の祭祀権を有した別当寺であった。大日寺の門前集落である大井沢中村には、数十軒の宿坊が存在した。

出羽三山の登山口としての八方七口は、月山をとりまくように立地しており、庄内側には、羽黒口・大網口

七五三掛口が立地し、羽黒山寂光寺・大綱大日坊・七五三掛注連寺が別当寺として存在した。

一方、内陸側には、最上盆地の肘折口、村山盆地の本道寺口・岩根沢口・大井沢口が立地し、烏川阿吽院・本道寺・日月寺・大日寺が別当寺として存在した。

これらの登山口は、おおむね交通路に沿って信仰圏を広げており、本道寺口と岩根沢口は村山盆地から六十里越街道を経由して利用する参詣者が多かったのに対して、大井沢口は置賜盆地から北進してくる参詣者を多く集めた。それに加えて、置賜盆地から南へ峠を越えた会津盆地、さらには奥会津から南へ下った下野国（栃木県）方面からの参詣者もみられた。

大井沢の大日寺は、明治36年12月16日に火災のために焼失し、別当寺に伝来する古文書は残されていないが、今なお残る礎石から、その雄大な規模を知ることができる。大井沢に伝わる古文書の日記には、大日寺の参詣者が5000人に達した時に餅つきを行ったという記録がみられ(堀伝蔵1977)、参詣期間は年間の2ヶ月ほどであったことから、一日当たり100人ほどの旅人が道智道を通じたものと想定される。

この道智道を実際に歩いた旅人の記録として、「最上庄内越後道中記」を紹介しよう。この道中記は、天保14年(1843)8月に出羽国泉村(長井市)の鈴木清三郎義満が記したもので、山形大学附属図書館に泉八島家文書として所蔵されている。以下に一部を引用する。

- 一 小寺 一り半 是より地藏峠有
- 一 目附 一り半 宿 永長坊泊
- 一 大井沢 一里 湯殿山正別当 大日寺 宿坊 福蔵院 山先達 頼雲坊

ここに記された「小寺」は、現在の大江町古寺、「目附」は西川町見附であろう。古寺は、古くは朝日山地の信仰の拠点として寺院群が存在したともいわれ(松田2006)、左沢御領内御絵図には、道智道のうち、朝日川を渡る木川橋のたもと、大井沢側に、三山参詣者のための休憩用の藁屋根の掘っ立て小屋風の建物が見えることが指摘されている(金山1996)。

イ 大沼浮島から小清・貫見へ

さて、この道智道に対して、大沼浮島から小清に至る街道は、六十里越街道の脇往還として利用されたもので、朝日山地の山岳信仰と関わりを持つとされる大沼浮島の聖地に立ち寄って、出羽三山へ参詣するルートとなっていた。

ここで、利用される登山口は、大井沢口ではなく、本道寺口であり、大江町の小清から貫見を経て、峠を越えて西川町の入間へ下り、本道寺へと至った。一般的には、山形の城下町からまっすぐに六十里越街道を経由して本道寺口ないし岩根沢口を利用する機会が多くみられたが、大沼浮島を迂回する場合も、しばしばみられた。

小清から大沼へ至る旧道の分岐点に追分石があり、右が大沼への道、左が大谷村への道であることを示しているという。かつては、もう1基の追分石が、このいろは峠に存在し、写真も残されているが、今は不明となってしまったようだ。

小清の枝村である十郎畑には、羽黒派修験の善正院があり、この地を通る三山参詣者の先達を勤めていたが、明治の神仏分離に際して復飾したといい(土田1987)、里山伏が登山口までの里先達を勤めたか、あるいは本道寺口の山先達をも勤めたのかもしれない。この家には、先祖伝来の法螺貝や三山神社の烙印のある板札などが存在するという(『歴史の証言』)。

このルートを歩いた具体的な旅の記録として、「奥羽越自岩城至越後道中日記」があげられる。この日記は、万延元年(1860)のもので、茨城県からの旅の記録であり、鶴岡市立図書館の所蔵である。以下に一部を引用する。

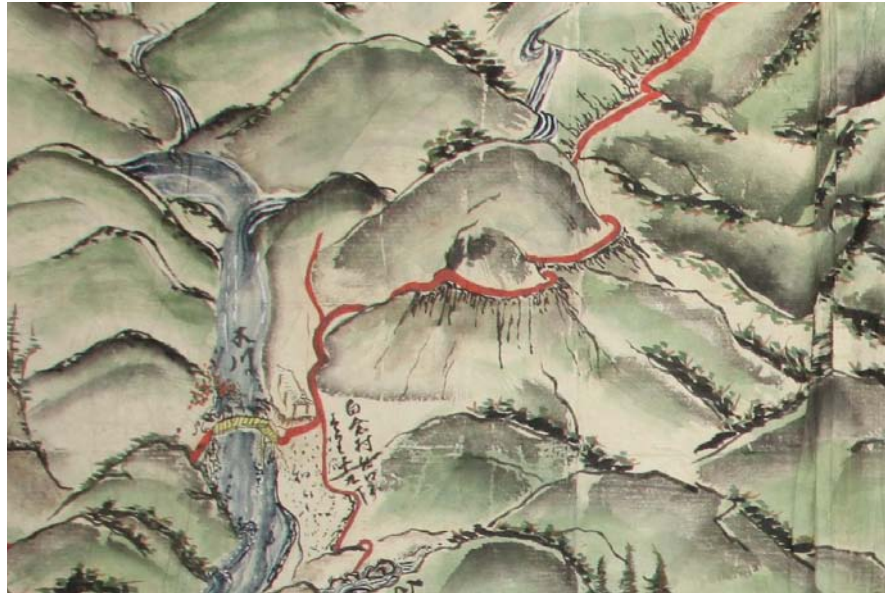
大沼山より本道寺 五り

大沼 イロハ坂 一り八丁 小清 二十六丁 貫見 一り上リテ 小柳 一り下り

入間 半り 八聖山 半り 本道寺

この日記にみえる八聖山もまた、出羽三山に付随する聖地であり、秋田県方面の鉱山労働者の信仰を多く集めたことで知られる。

なお、大江町から置賜盆地にかけて広くみられる「高い山」行事は、田の神となるべく山の神を迎えに登山する春の行事であるとされるが、虚空蔵信仰と関連するとの指摘があり（佐野 1996）、白鷹山の信仰との関連も指摘されている。



「左沢御領内御絵図」
(掘立小屋部分)

第2節 経済的・文化的交流

(1) 町場と農山村の互惠関係

本稿では、左沢と農山村の交流関係を、町内に残る資料や聞き取り調査を元に検討した。以下調査や資料の概要と、それらから得た知見、考察を記述した。

① 高取俊之氏への聞き取り

2010年8月2日に、左沢で味噌・醤油の製造販売を営んでいた高取俊之氏に聞き取りをおこなった。高取俊之氏は大正12年3月25日生まれ、満87歳である（調査当時）。

ア 聞き取り調査の概要

居住地：大江町左沢

職業：醸造業（醤油・味噌）9代目

[聞き取り内容（要約）]

高取家初代は約270年前に西川町入間の小山から移住した。「高取」は小山地区にある字名からとっている。初代は江戸時代の宝暦年間に亡くなっていることは過去帳から確認できる。実相院墓地（左沢楯山城ふもと）に初代からの墓がある。明治16年に7代目が醤油業を始め、屋号を「大山屋」といった。それ以前は青苧の仲買を行っていたと聞いている。醤油業はかつて左沢に一つしかない独占的な商売だった。昭和11年の左沢大火で母屋は焼失し、現在の建物は昭和12年のものであるが、梁や桁などが太く古い建築様式を残しているといわれる。当時通常の家はおよそ1,500円で建ったものだが、高取家は5,000円かかっており今なお頑健な建物である。母屋の裏には工場が続いており味噌蔵・醤油蔵などがあったが、平成元年にこれらの醸造蔵を解体した。

昭和30年初め頃からオート三輪車に乗って道海、柳川、貫見、月布などにある小売店に醤油を卸しに行った。一斗樽で5、6本、のち一升瓶10本くらいを売り回った。小清地区の1、2軒では一斗樽で個人注文する家があった。醤油はほとんど自家製はなかったので山間の集落に売りに行ったのである。

左沢の町場の商人たちもかなりが山間部へ売りに行った。つまり、昭和時代までは「沢に登って卸して食べさせてもらった」といえる。町場の商人たちは山手に行くことを「沢筋を登る」という表現をしたものだ。逆に道海からは炭8貫目を背負って町場の問屋に売りに来た。左沢は水田が少なく辺り一帯はほとんど戦後に新田開発がなされており、いわゆる地主の少ない地域である。左沢は商人が住む町であって西川町や朝日町も相手に商売をしていた。

寒河江出身の妻とは昭和23年に結婚した。寒河江に西村山郡役所が出来てから左沢が衰退した。それ以前は寒河江と左沢にそれほど差はなかった。むしろ左沢は「派手な町」といわれ、妻も前からそのように聞いていたという。嫁いだらやはり駅前には回り舞台などがあって、あらためて派手なところだと実感したという。やはり舟運の影響なのだろうか。「寒河江女に谷地男、嫁にやるなら左沢」というたとえが長く伝えられている。



高取俊之家（左沢）



「大山屋」の半纏

イ 高取俊之氏聞き取り調査をもとにー 山間集落と町場との経済関係

山間集落の生業と左沢

高取俊之氏においては、かつての七軒村などの山間集落と町場の密接不離の関係性が具体的事例をもって語られている。それは商業・交易によるものである。商店の品々を山間の集落到に届けて消費生活を成り立たせている。「沢筋を登る」という表現は月布川を上流方向へ遡って山間集落に行くということであり、「沢に登って卸して食べさせてもらった」という率直な言葉は、山間集落と町場が形成した共存的経済構造を端的に物語っている。

一方では、山間からは薪や木炭などの燃料が町場に運ばれて来た。江戸期の記録になるが、天明8年（1788）に記された「村々様子大概書下」には、「農業の間に男者薪を取女者太布を織青苧作り出す」と書かれている（『大江町史』）。つまり、天領となった旧左沢領46か村のどの村々でも男性は薪を取ること、女性は青苧織りに従事していたことがわかる。

薪の山出しは七軒村古寺山や田の沢の山などからであり、左沢をはじめ寒河江、長崎方面などへ売られた。『大江町史資料 第五号』の安政2年（1855）「左沢代官文書」によれば、長崎へ売られる薪や炭は左沢から最上川の船を使って運ばれている。また、『大江町の語り部』の中の「15 忘れ残りの記 5、最上川の舟運」には次のように記している。

大正時代の中頃の事です。冬期になると、学校下の川にはよく大船が着いたものでした。大船はここで、木炭を積み込み、長崎まで下り、そこから積荷の木炭は、馬車などに積みかえられて、山形方面に送られ、そこで売り捌かれたものだと聞いてます。この船による輸送は、冬期間が主であって、夏季には、大船はあまり見られませんでした。その頃町には、小漆川に大沼さん、横町に能中屋（海野）さんと竹屋（松田）さん、原町には川村さんと廣野屋（廣野）さん、五十嵐さん、金山さんなどの問屋さんがあって、薪や木炭を扱っていたものでした。本郷地区、七軒地区は薪・木炭の産地であって、ここで生産される薪・木炭の大方は、これらの問屋の手を経て売り捌かれていたものです。本郷や七軒地区で生産された木炭は、よく六斎の市日などに、生産者は家族たちと、木炭を1俵、2俵と背負い、村人が連れだつて、左沢まで運んで来たもので、長い列は見事なものでした。

以上の語りは、安政2年の記録もさることながら、大正中期頃までは最上川を使った輸送運搬が短距離ながら続いていたことを証言するものである。また、薪や木炭などを通じて山間集落と町場と最上川舟運とは歴史的伝統的な交易関係で結ばれていたことをあらためて明確に伝えている。

町場の賑わい

ここで聞き取りをした高取俊之氏の話に戻るが、終戦直後の頃に左沢駅前に回り舞台があって、以前から聞いていたとおり、左沢は派手な所という印象をあらためて持ったということが語られている。左沢の人々は芝居が好きで見る目が高いといわれ、江戸時代から伝統的な観劇の風習があったとされる。芝居は神社境内や空き地を活用して興行するいわゆる青空劇場が多かった。高取氏がいうように、左沢駅前の広場にも劇場があってそれが回り舞台を持つ豪華なものだったのだろう。左沢には明治時代は富樫座、大正時代は共楽座という劇場があったことが知られている。昭和6年に建った左沢倶楽部という劇場は、昭和41年まで営業して左沢の人々に娯楽を提供した（『大江町史』）。

これも最上川舟運から受けた経済的恩恵や活況ぶりの一端が戦後も引き続いていたものと考えられる。百目木茶屋があり、飯盛女たちがいて、そして花街があったとなれば、左沢は高取氏のいう「派手な所」という言葉もうなずけられる。「寒河江女に谷地男、嫁にやるなら左沢」というたとえば、「嫁にやるなら苦勞をせず裕福な暮らしができる左沢」という認識が巷にあったということであろう。このような左沢の町場に対する評価は、最上川舟運を背景とする山間集落との交易関係から生ずる側面も少なからずあったであろう。

一方、左沢は出羽三山参詣者行路の一つとなり、左沢の旅館は夏には参詣者が宿泊する「お行^{ぎようさま}様の宿」として賑わった。左沢から月布川をさかのぼって貫見を通して大井沢と繋がる街道は「大井沢街道」と呼ばれ、三山行者の「信仰の道」であると同時に、左沢で月に6回定期的に開かれる六斎市という市場などに使用する「経済の道」でもあった。左沢は大井沢街道のみならず多地域と参詣行路で結ばれた「経済の中心地」として重要な役割を果たした（『大江町史』）。この出羽三山参詣については、後段でも詳細に述べることにする。

以上、左沢の町の賑わいは山間集落との交易、最上川舟運や出羽三山参詣者の往来など、複合的要素がからみあって生まれたといえよう。

② 斎藤徳治氏への聞き取り

2010年8月2日に、左沢の斎藤徳治氏に聞き取りを行なった。斎藤徳治氏は昭和3年生まれ、満82歳である（調査当時）。

ア 聞き取り調査の概要

斎藤家の由来

高山法彦氏（大江町文化財保護委員会委員長 当時）のご教示などを得たうえで、我が家の先祖については次のような認識をもっている。

斎藤徳治家は十郎畑の斎藤半助家の分家にあたる。分家は二つあったが、その一つ目は初代斎藤甚右衛門を名乗り、享和元年（1801）に現朝日町の和合組大庄屋になっている。二代佐市も和合組大庄屋、三代逸作は町・和合・川行三組大庄屋になっている家柄である。一方、二つ目の分家である斎藤権右衛門は、二代権右衛門が寛政13年（1801）に没しているの、初代は30年くらい前に生存していたと思われる。三代権右衛門は天保4年（1833）まで左沢北郷組の大庄屋を務めた。

斎藤徳治家は二つ目の権右衛門の家系にあたる。斎藤甚右衛門家は内町に「加賀屋」、権右衛門家は御免町に「裏加賀屋」という商店（問屋）をもっていた。この二つの店は十郎畑に居住する本家斎藤半助家とともに、広く村々で栽培される青苧を集荷販売する商業を営んでいた。加賀屋の菩提寺は実相院である。

山間の集落と左沢の関係

かつて左沢の町場では、山間の集落からは雑木の薪や炭などの燃料となるものを提供してもらっていた。山間には木流しの人々や運送業に携わる人々が多くいた。その運送業者は左沢駅にいて馬車を運行させており、御免町、天神町、原町、本郷には馬車屋があった。左沢には紙漉屋もあった。



斎藤徳治家周辺の街並み

イ 斎藤徳治氏聞き取り調査について—斎藤半助家一族と青苧

斎藤半助家と二つの「加賀屋」

『大江町の歴史探訪 地名を探る』の「十郎畑」には、「斎藤半助は青苧栽培を手広く行い、幕末の麻糸生産が13貫と村内最高だった。また左沢に加賀屋を構え、集荷した麻糸を各地に移出して商い、明治初年には有数の地主だった。」と記している。

『大江町史』では、「加賀屋が左沢御免町に土地と土蔵を購入したのは、元文5年（1740）であるが、この頃に左沢の三つの町にはかなりの店舗があり、加賀屋もほどなく店舗を構えたようである。甚右衛門は享和元年（1801）和合組大庄屋になっているので、明和—安永の頃には商人として活躍していたのであろう。」と記している。ここで元文5年に御免町に店舗を構えた加賀屋とは、斎藤半助家の分家の一つである斎藤権右衛門家の「裏加賀屋」のことである。もう一つの分家で内町に店舗を構えた斎藤甚右衛門家が「表加賀屋」である。

本調査にあたり、斎藤徳治氏から「掛り物目録」と名付けられた斎藤半助と斎藤権右衛門宛文書が示された。年号は文化元年（1804）と記されている。この文書はすでに『大江町史』に掲載されており大方は承知のことと思われる。あえてこの文書の概要を記すと、斎藤家は青苧5駄を酒田の市村屋治助に売っているが、その輸送経路は、大石田松惣船より直出ししてまず酒田に運び、さらに能登の川崎屋忠右衛門の船と熊木屋六右衛門の船を使って敦賀まで運んで蔵に納めている。（『大江町史』によれば、当時青苧1駄とは米36俵分の値段に相当した。）

以上、ここでは明らかに当地の青苧が斎藤家の手を経て、最上川舟運と西回り航路を辿り各地に運搬されている様子が確認できる。なお、斎藤家が扱った青苧については、第6章にも掲載しているものもあり、ここでは文化元年の文書内容についてのみとした。

山間集落の青苧はいかに商品価値が高く、それがもとになって各地域との経済関係が強まったか。そのことが前掲『歴史の証言』の中で左沢八区の白田佐助さんが語る「青苧問屋の勤め」によく表されているので、その一部を紹介する。

沢口の鈴木家で青苧を買い付けたのは、まだ若い頃、巨海院で徴兵検査を受けた次の年でした。この頃、私は松程（注：現朝日町）の青苧問屋阿部清吉家の番頭役で、買い付けのため、白鷹・朝日・西川・大江の各村々を泊まりがけで歩き回ったものです。（中略）繭なら年に何回も売買するが青苧は1回だけ。時期は秋9月から10月にかけて。金をもっての一人旅は心配でした。一度松程を出ると普通2,3泊します。立

木から七軒に入るには、背中ぶり峠から勝生へ。十郎畑・貫見・柳川を巡り征矢形^{そやがた}へ出ます。道海の鈴木徳四郎（鈴木都知事の父親の生家）、小清の佐竹吉兵衛家、中ノ畑の松田喜蔵家、征矢形の板花権蔵家等に泊まりました。

青苧問屋の阿部家には県外からの青苧荷主が常に入出入りしました。なかでも小千谷と能登からの常連は、私にも馴染みの客でした。主人清吉は篤実な方で長く区長を勤め、信望が厚く字が上手な方でした。県外からの上客が泊まると、必ず朝日川のうなぎを取り寄せて歓待したものです。小千谷からの常連4人のうち玉屋理右衛門が最も有力でした。（中略）新潟の小千谷と石川県の能登地方は、どちらも高級織物の産地。繊維原料の青苧の大部分は山形産のものでした。最上青苧の中でも上場（良質物）の産地は七軒・立木・中山・栃窪に限られ、なかでも七軒苧が珍重されました。左沢・三郷・大谷産の物は下場苧と呼ばれました。小千谷・能登の客の求めに応じ、私が各地へ出向いて買いあさったのは、すべて上場でした。

以上が引用文である。ここで高い評価を受けている七軒苧は齋藤半助・権右衛門・甚右衛門などの手によっても山間から町場に集荷され、最上川舟運で他地域に移出されたことは先の文書に表れているとおりである。

③ 巨海院の石造手水鉢

ア 手水鉢の概要

巨海院の境内参道南側に石造手水鉢がある。上部には「象頭山」の銘があり左沢商人12名の名前が刻印されている。文政7年（1824）に奉納されたことが記されている。この中に齋藤権右衛門の名前もある。これは最上川と日本海を結ぶ航行安全を祈るためのものと考えられる。航海安全の守り神が祀られる金毘羅神社（金刀比羅宮）が建立されている山が象頭山である。巨海院堂内には「金毘羅大権現」像も鎮座している。この金毘羅信仰と関連して、明治14年遊女屋で奉納した「金毘羅大善神」と大書きされた幟旗が奉納されて今も保管されている。祭礼日は3月10日である。



手水鉢に掘られた「象頭山」と商人の名前



石造手水鉢

イ 青苧商人と航行安全祈願

斎藤徳治氏は巨海院境内にある「象頭山」銘の石造手水鉢についても語っている。この手水鉢にはこれを寄贈した12名の左沢商人の名が刻印されている（現在判読は極めて困難）。その商人とは、表加賀屋の斎藤甚右衛門をはじめ、鈴木佐太夫、小国幸右衛門、五十嵐利兵衛（五十嵐屋理兵衛）、清野吉右衛門、高橋仁左衛門（柏屋仁平次）、後藤重助、菊地孫七、斎藤甚助、小国栄次郎、森土三五郎、荒木新蔵の12名である。この商人たちはいずれも青苧の商いに関わっていたいわゆる「青苧商人」といえる。このほかにも内町の米沢小右衛門や御免町の富士屋文治などの多くの青苧商人が存在した（『大江町史』）。

これらの青苧商人たちは、最上川舟運と日本海海運を通じて上方や北陸方面に物資輸送を行っていた。その際に航行安全を切に祈ったことは、最上川流域に「航行安全」「船中安全」の銘ある石灯籠や狛犬、石碑などの石造文化財が多く建立されていることとまったく同じである。急流や難所などが多くいかに難船、破船などが恐れられたかを物語っている。

以上、手水鉢に刻印された守り神「象頭山」に寄りすぎる奉納者の気持ちが伝わる一方で、当時の青苧商人たちの財力と結束力、当時の彼らが占める主要な商業的位置ということも感じ取ることができる。

④ 山間集落と町場との経済・交易関係

江戸期の商業について、『大江町史』によれば、商業を営める者は町場にのみ許可され、農村部では認められなかった。文久2年（1862）に松山藩の左沢領内においては商業を規制し、代官所の鑑札を得て営業していた商店は40軒あった。また、左沢では六斎市という町の市場が1か月に6回が開かれ、このほかに初市、雛市（ひないち）、馬市が開かれた。これらの市日には山間集落の人々も青苧や木炭などの特産品を持ち寄り売った。青苧については特に定められた市日のみ売買が許された。山間集落と町場との経済・交易関係は普段はこういう市場を媒介にして行われたといえる。

さて、前掲『イリの村の生活と子ども』には七軒地域の生産構造が次のように捉えられている。

- ・江戸時代後期…米と雑穀に青苧・養蚕・木炭
- ・明治20年代…米と青苧に養蚕・雑穀・木炭
- ・明治30年代…米と養蚕に雑穀・木炭

このように、主食の米や雑穀を基本に、「青苧・養蚕・木炭」が生業活動の3本柱となっており、とりわけ青苧が明治20年代までは生業の主力をなしていることが把握できる。

木炭について、『七軒東の郷土史』では七軒村の山間部を中心に行われ、昭和28年頃までは全盛であり、その後次第に衰えていったという。同じく『大江町史』では、「最も炭の需要が多かったのは、大正から昭和の初期、及び昭和25年頃で、その生産量は七軒で10万貫を遥かに越していたようである。」と記している。戦後の生産量の70～80%は県外移出だったという。

大正時代の七軒地域の木炭について、次のような語りもあるので記しておく（『歴史の証言』）。

[駄賃とり 沢口 大沼安吉さん(85歳)]

私の青年期といえば、大正時代にさかのぼりますが、当時七軒から生産される木炭をそりで左沢の炭間屋まで運搬して駄賃とりをしたので、その時代を思い出してみます。大正5年頃、七軒地区から日産200俵以上の木炭が生産されており、冬期間だけでも3,000俵以上の木炭が生産されていたことは、私の日記から確かです。勿論私の家でも、炭焼きをしておりました。当時の木炭は三味線俵につめられており、また木炭1俵の目方も一定でなく(乱貫)、今考えてみると、とても面白い炭俵でした。沢口から左沢の炭間屋までの運び代(駄賃)は1俵が25銭でした。普通の人で2俵、丈夫な人で3俵をそりで運搬するのが常でした。

(中略) 三味線俵に詰まった木炭を積んで沢口を出発するのは朝の7時半頃。気の知れた友達5,6人で一緒に出発しました。(中略) 当時の左沢には、うどん屋、竹屋、広野屋、金山屋、能中等の間屋がありました。沢口を朝出発し、左沢の炭間屋に着くのが昼頃でした。間屋に着くと木炭の目方を計ってもらい、駄賃はすぐに現金でもらうことができました。駄賃を受け取ると、家からもって行った焼飯にかぶりつきました。間屋ではたいい昼飯の時は、漬け物と味噌汁を出してくれました。沢口から4時間半もそれを引っぱりどうしなので、昼食は何よりの楽しみでした。左沢の炭間屋からの帰りは、ほとんど空そりでしたが、たまには米や魚などの日用品等を頼まれることがありました。(後略)

以上のように、七軒地区の人々の手によって同地区の木炭が左沢の間屋に運び込まれた様子を知ることができる。

また、同じような流通経済の一例として、木灰も藍染めの媒染材として需要があった。それは江戸時代から大正時代始め頃まで主として七軒地区で作られ、左沢小漆川の菊地五三郎間屋に売り渡されて大量に染め上げられた。木灰はさらに谷地・長崎・山形方面にも運ばれた。なお、木灰については前年度報告書にもすでに述べている。

最後のまとめになるが、高山法彦氏は、「左沢の商店街は山村を背景にして栄えていた。かつては、山間部は青苧・生糸・米・大豆・木材の原産地であり、一方では生産し、一方では販路を求めて換金することを必要とした。」と述べている（『地域社会研究』第24号）。ここでは、「米」の部分を除いて左沢と山間部の経済関係がよく示されている。米については、高山氏とは異なった証言があることも付け加えておこう。つまり、「昭和初期から製炭業が盛んになり、七軒村の木炭は左沢方面の燃料となり、反対に本郷・左沢の米が七軒村へと運ばれた」（『大江町の語り部』）というものである。私見であるが、米は左沢方面から七軒村などの山間集落へ運ばれたというのが実態ではなかろうか。

ところで、『大江町史』では、「前句寄も一つは中央の文化、一つは最上川沿の舟町としての交流、もう一つは同藩内部の文化の交流として栄えたと見られる。」と記している。ここで二番目にあげられているものは、やはり最上川舟運から生まれる文化交流ということだろうと思われる。そこで、三番目の「同藩内部の文化交流」という点について、これは先にみたように、山間集落と町場との経済・交易関係があったために前句寄などの文芸・文化が町場から山間へと伝播交流したと捉えることができるだろう。

このような交易は近代に入ってからも続いており、高取氏のいうように左沢の町場から「沢筋を登って」月

布・貫見・柳川・道海など山間集落へ数々の商品が運ばれて消費された。逆に山間から町場へは薪・木炭・木灰・青苧（のち養蚕の生糸）などが売られたことは先にみたとおりである。これらは町場で消費されるものもあれば最上川舟運によって遠隔地へ運ばれた。青苧や木炭などの産物はその場で換金されて現金収入となる場合が多かった。この山間集落の人々の金銭的ゆとりこそ文化的ゆとりとなり、それが前句寄を受容し流行を生むもととなったのであろう。これは山間集落と町場との歴史的互惠関係の上に成り立った文化現象といえる。

薪炭を軸とした山間と町場の生業的關係は、昭和30年代頃から始まる燃料革命・エネルギー革命をさかいに次第に消滅していったとみられる。

⑤ 青苧と町場と最上川舟運

本文では、十郎畑在住の齋藤半助家、および分家の左沢に店舗を持つ齋藤甚右衛門家と齋藤権右衛門家の青苧売買について触れてみた。この三家の商業活動をも山間集落と町場の関係が象徴的に映し出されており、山間と町場さらには最上川舟運が絡み合っただんな経済的機能を果たしたのかがおおよそ理解できる。

青苧の商品価値の高さがどのように各地域を結びつけ経済関係を深めたか、『歴史の証言』の中で左沢八区の白田佐助さんが語る「青苧問屋の勤め」の一文がよく示していた。そこでは七軒苧の優れた商品価値があらためて浮き彫りになった。そして新潟県小千谷や石川県能登地方にまでその名が聞こえて荷主が買い付けに訪れている様子が明確に読み取れる。

商談が成立すれば青苧の現物は最上川舟運を通じて新潟・直江津・伏木・七尾の各港に荷揚げされ織物生産地へと運ばれた（各港名は明治以降）。当地方の青苧は、江戸時代の後期以降は小千谷・十日町・柏崎商人（新潟）、^{いまいするぎ}今石動・高岡商人（富山）の買付けが多くなり、最上川舟運による北陸地方との経済的結びつきが強まっていたのである（菊地2006）。

このように青苧が高級特産品であるが故に、山間集落に経済的文化的豊かさをもたらし、さらに町場との交流をも促進させていたことを知ることができるのである。

（2）出羽三山参詣と山間集落の生活文化

山間集落への前句寄の浸透・隆盛のきっかけは、左沢との経済・文化交流に認められると思われる。その一方で、それは遠方から訪れる出羽三山の参詣者往来にも起因しているのではないかと考えられる。山間集落の生活文化については、ここで三山参詣者往来の視点から述べてみたい。

① 三山参詣者がもたらす経済的効果

前句寄を可能とした背景について、先に青苧による山間集落の安定的経済生活について触れた。ここではさらにもう一步踏み込んで、三山参詣者往来による経済的影響という点について触れておきたい。

『大江町史』・『大江町史 地誌編』によれば、貫見村の百姓代松田八郎兵衛家は元禄2年（1689）に大井沢大日寺の惣先達宿をした人物であり、やがて大日寺指定の行者宿を営んだ。元禄10年（1697）の『大福覚帳』によれば、元禄10年から享保元年（1716）までの20年間で約2万人の宿泊者があり、年平均で1,000人だった。宿泊料は宝暦年間（1704～1710）に1人20文ということで、1,000人の宿泊者がいれば宿料は5両になったという。

三山参詣者の宿泊についてもう一つの事例をとりあげよう。十郎畑では羽黒修験の天台宗善正院が三山を案

内する山先達と宿坊を営んでいた。『歴史の証言』の中で「先達の家」のタイトルで斎藤豊正氏は次のように記している。

先達とは信徒を引率し指導する者をいいます。西村山の場合は出羽三山参詣の行者を世話する専門の指導者を指しました。大井沢・本道寺などの宿坊の先達を山先達とよび、三山から遠距離の先達を里先達といたしました。私の先祖は山先達でした。(中略) 十郎畑の私の家は、むかし善正院という修験の寺でした。

(中略) 十郎畑の私の家は、一般農家とは一風変わった造りでした。宿坊の特徴として、多い部屋数、トイレが2つ、引き込み玄関、途方もない大きい祭壇回数地内の水垢離用の池等があげられます。(中略) むかし、勝生から十郎畑へ入るには今の車道とは違い、深い谷あいの田畑の間の細い道をたどりました。置賜方面からの一部の参詣者は勝生・十郎畑のコースを選びました。立木まで迎え出た先達が谷あいの道に差し掛かると、必ず法螺貝を吹きました。参詣者の人数によって吹く回数を違わせるのです。客を待つ宿坊では、宿泊人員を事前に察知し、女衆が身ごしらえをするなど受け入れに気を遣いました。

以上のことから、修験寺院は三山参詣者用の宿泊施設として機能していることがわかる。正善院のみならずこのような修験寺院はかつて他にもあったことが考えられる。貫見地区の地藏院、沢口地区の宝性院、青柳地区の定法院・大法院などは宿泊機能を有していたのか、今後の検討課題である。

ところで、十郎畑の青苧商人斎藤半助家では三山参詣者用の煮炊きに使ういろり(「下いろり」)を持っていたという。精進料理を作るため家人用いろりとは別に設営されていたものである(小野 1977、『大江町史』)。十郎畑の斎藤家に限らず、三山参詣行路にあたる山間集落の豪農や名主クラスは参詣者を歓待し人々を宿泊させていたことも考えられる。

② 参詣道から市場道へ

三山参詣行路の一つとして、左沢に入って月布川に沿って進んで貫見に至り、さらに沢口・柳川を通って大井沢峠を越えて大日寺と湯殿山に向かうルートがあった。この参詣行路は大井沢街道といわれた。この街道の性格について、『大江町史』では先の貫見村の松田八郎兵衛が元文年間に漆山代官所へ提出した願状の内容を踏まえて、次のように記している。

大井沢街道の性格は、一つは湯殿山、大井沢への参詣道路であり、もう一つは大井沢の人達の左沢市場への道路であると記されている。大井沢大日寺から湯殿山に行く行者道、もう一つは大井沢、七軒など左沢山内の経済道路であった。近世の左沢は大井沢のみならず、吉川、沼山、本道寺、月山沢に至る寒河江川山内、及び左沢領内の朝日川山内にわたる広範囲の経済の中心地であった。

以上に示された大井沢街道に関する商業的機能について、前掲『歴史の証言』からさらに2つの具体的事例を以下に紹介しよう。

まず一つ目は、「大井沢街道の茶店」である。諏訪堂の鈴木誠さんの家が「お諏訪堂の茶屋」といわれ、大井沢街道において明治初期から55年間繁盛した店だったという。昭和13年に店を閉じるまで、旅人用の草鞋、草履などのほかに各種の駄菓子があった。また、あんびん餅・だんご・こんにやく・酒・小麦粉・納豆・テンプラ・めん類など手近かな食品を置き、夏分には欠き氷・てんも売ったということである。

このような茶店は大井沢街道のみならず、道智道沿いや大井沢峠など三山参詣者が往来した場所にあったのではないかと考えられる。

次に2つ目は、『歴史の証言』「大井沢峠」という文章であるが、次のように記されている。

佐藤屋永四郎さんは、明治の初め左沢では最も大きな商家で、今ならデパートの役目を果たした何でも屋でもありました。明治10年の大福帳の売り上げ記録に、大井沢へ出した品物が詳細載っています。次に主な物をあげてみます。

- ・海産物 こんぶ、のり、魚類
- ・繊維品 反物、青苧、打わた、紺足袋、縫い糸
- ・畑作物 大小豆、いも、ごま、にんじん、ごぼう
- ・嗜好品 茶、たばこ
- ・一般食品 餅米、うどん、塩、油揚、しょう油、ふ
- ・日用品 紙類、ろうそく、せと物、ほうき、水油

当時大井沢の生活物資の中で、左沢から上らない品物は無かったと言っても過言ではなく、強いて探せば山菜・木材・木炭ぐらいのものでしたでしょう。これらの生活必需品は、左沢の商人が運賃加算で柳川平まで輸送します。その先大井沢村では、重量物でなければ大井沢衆の背負い子が背負っていきます。(中略)

柳川から大井沢へのコースは次のようにたどります。

柳川—ぶな茶屋—道口—矢引沢—石積地藏—桂水—大井沢峠—水呑場—権六あらし—下中上(大井沢)

ここでは、大井沢峠を越えて現西川町方面と左沢との間で重要物資と人々が行き交う様子がよく伝わってくる。

以上、ここまでは三山参詣者たちは貫見や十郎畑などの山間集落に寝泊まりしながら行路を行き来したこと、信仰のみならず商業活動のため大井沢街道や大井沢峠が大いに活用されたことなどをみてきた。これらの経緯を踏まえれば、山間集落にとって受けた経済効果には少なからぬものがあつたことは十分に想定される。むしろ、地域経済に与えた影響は予想を越えるのであつたかも知れない。

大井沢街道は、古来出羽三山信仰の「参詣の道」を基本として成立して、のちに物資輸送の「交易の道」としての機能が加わって大なる役割を果たしたといえる。今でこそ静かなたたずまいをみせる山間集落ではあるが、その暮らしの歴史はこのような三山参詣史とともに産業史的な分析が今後もっと必要となるだろう。

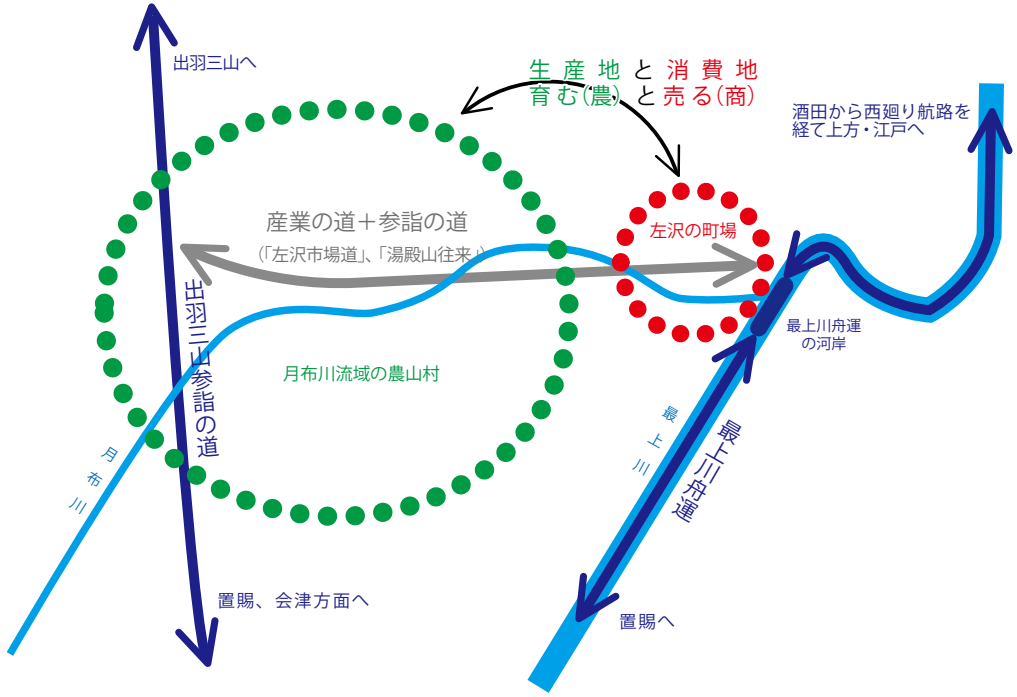


図7-3 町場と農山村の交流関係 模式図